

～3. Jordan 法～

2021-03-03 福田 浩

1 Python スクリプト

基本的には C++ のソースファイルを 1 行毎 Python に変換している。Python の変換する上での注意点は以下。

- Python で 2 次元配列の初期化には `a = [[0 for x in range(n+1)] for y in range(n)]` を使用
- 元数 n の標準入力からの取得は `n = int(input())`
- 係数 $a[i][j]$ の標準入力からの取得は `a[i][j] = float(input())`

```
1 EPSILON = 0.001
2 n = int(input())
3 a = [[0 for x in range(n+1)] for y in range(n)]
4 for i in range(n):
5     for j in range(n+1):
6         a[i][j] = float(input())
7 for i in range(n):
8     pivot = a[i][i]
9     if abs(pivot) > EPSILON:
10         for j in range(i, n+1):
11             a[i][j] /= pivot
12         for k in range(n):
13             d = a[k][i]
14             for j in range(i, n+1):
15                 if k!=i:
16                     a[k][j] -= d*a[i][j]
17     else:
18         print("Pivot: ", pivot, "is too small.")
19 for i in range(n):
20     print(a[i][n])
```

2 課題の解答

$$\begin{cases} 3x & +y & +z & = 10 \\ x & +5y & +2z & = 21 \\ x & +2y & +5z & = 30 \end{cases} \quad (1)$$

の解

1.00000000000000004

2.0

4.9999999999999999

$$\begin{cases} 0.51x_1 & +0.95x_2 & +0.80x_3 & +0.28x_4 & +0.41x_5 & = 16.7 \\ 0.39x_1 & +0.25x_2 & +0.43x_3 & +0.28x_4 & +0.88x_5 & = 9.8 \\ 0.55x_1 & +0.91x_2 & +0.12x_3 & +0.23x_4 & +0.31x_5 & = 10.4 \\ 0.26x_1 & +0.66x_2 & +0.95x_3 & +0.52x_4 & +0.57x_5 & = 17.7 \\ 0.83x_1 & +0.73x_2 & +0.62x_3 & +0.16x_4 & +0.77x_5 & = 14.1 \end{cases} \quad (2)$$

の解

1.311160993497137

6.931843040494124

8.054233685446567

7.328872362964148

2.318501938682501

3 ill-condition

$$\begin{cases} 99x & +98y = 197 \\ 100x & +99y = 199 \end{cases} \quad (3)$$

の解は $x = 1, y = 1$ である。一方、上式の x の係数が 0.01% 減少した

$$\begin{cases} 98.99x & +98y = 197 \\ 100x & +99y = 199 \end{cases} \quad (4)$$

の解は $x = 100, y = -99$ である。僅か 0.01% の変化で解が大きく変わる場合がある。これはそもそも 2 元連立方程式を構成する 2 つの方程式が「近しい」ことに起因する。2 つの方程式をグラフ化したときの直線の傾きはそれぞれ $-99/98 \sim 1.01020408$, $-100/99 \sim 1.01010101$ であり、僅か 0.01% しか違わない。2 元連立方程式は 2 つの未知数と 2 つの方程式からなるが、この際、2 つの方程式が異なる場合に、2 つの未知数を同定することが出来る。2 つの方程式が異なるとはいえ非常に近い場合は、ill-condition になり、解が不安定になる。

連立方程式の解が求められる実用シーンでは、方程式の係数は測定により求められる場合が多い。測定には誤差が伴う。誤差を含む係数を備える連立方程式が ill-condition になるとその解の信頼性は著しく低下する。連立方程式を解く際は ill-condition の事前考察が不可欠である。